

タイトル	<i>The Giving Tree</i>				
著者（文・絵）	Shel Silverstein				
出版年	1964	出版社	HarperCollins		
翻訳版	『おおきな木』ほんだきいちろう訳、篠崎書林、1976年 『おおきな木』村上春樹訳、あすなろ書房、2010年				
総語数	620語	ページ数	64ページ	YLレベル	2.4
あらすじ					
<p>ある少年と仲良しのリンゴの木のお話です。小さな少年は木のそばで安心して遊び、木はいつもその少年を見守っていました。けれども成長とともに、少年の関心は仲良しの木のことよりも、他のことに向いていきました。恋人との時間を楽しみ、お金をほしがり、家をほしがり、船をほしがりました。木はそれを寂しく思いながらも少年のために自分の果実、枝、幹を与え続けます。最後に少年が戻ってきたときには木はすでに切り株になっていて、何もあげるものがないことを嘆きます。しかし、そのときには少年はもう欲しいものもなく疲れた老人になっていました。木は自分の切り株に腰掛け体を休ませるようすすめて、老人となった少年は静かに切り株に腰を下ろすのでした。</p>					
紹介					
<p>本作品は、アメリカ人作家シェル・シルヴァスタインの絵本の中で最もよく知られた作品です。タイトルの <i>The Giving Tree</i> そのものに、この木は少年に自分の果実、枝、幹を与え続けます。この与える行為がこの作品の大きなテーマで、様々な解釈がなされています。一般的には、木が she となっていることから、木と少年の関係を母子の関係ととらえ、木の行為を母親の無償の愛とする解釈が多いようですが、他には木を友人ととらえたり、神ととらえたり、母なる自然（とその破壊）ととらえたりといった解釈があります。なお、この解釈に関する興味深い調査があります。この作品を読んだ日本、韓国、イギリス、スウェーデンの子どもたちの受け止め方を調査したところ、木を母（親）として解釈した日本の子どもは他国に比べて多く、80%近くになったということです（守屋、1994）。社会環境が個人の解釈に影響を与えていることが見て取れますが、この作品を翻訳した村上春樹は、「物語は人の心を映す自然鏡のようなもの」と言っています。</p> <p>個人的には、母親の無償の愛よりもお金が必要になったときだけたかりにくる浮気者の恋人に尽くし続けてしまう女性に近いように思えました。「無償の愛」を与えたことで、木は幸せだったのでしょうか。木は少年が来るたびに喜びに震え、幸せだと言っていました。木は少年が来るたびに喜びに震え、幸せだと言っていました。けれども最終的に少年が老人となって戻ってきたときには再び幸せだということです。</p> <p>そもそも無償の愛を与え続けることはいったい誰にとってよいことなのでしょうか？ 無償の愛を与えられた「ぼうや」は、それをありがたいと捉えているのかは疑問です。むしろ「ぼうや」の自立を阻む過保護な愛だったといえなくもありません。一方、報酬を期</p>					

待せず与えることは、与える人にとって損のようにも思えますが、自分の存在意義を示す承認行為ともいえそうです。

もちろん、木が何を象徴しているかの捉え方の違いによって、与えることの意味や幸せの意味も変わってくるでしょう。大人が読んでこそ、様々な解釈について深く思索できる絵本です。30か国語に訳され、世界中で愛されています。

日本では本田錦一郎訳(1976)と村上春樹訳(2010)があります。翻訳された時代もかなり違いますが、前者は「だ・である」調、後者は「です・ます」調で書かれ、全体の雰囲気は随分異なります。特に訳し方の違いが浮き彫りになっている一文を見てみましょう。

原文 And the tree was happy...but not really

本田訳 きは それで うれしかった… だけど それは ほんとかな

村上訳 それで木はしあわせ…なんてなれませんか

この二つの訳し方を見るだけでもその違いが明らかでしょう。

また本田訳では木の性別は明確にされていないのに対して、村上訳ではそれがしっかり伝わるように書かれています。英文に忠実なのは村上訳ですが、個人的には本田訳のほうがしっくりくる感覚があります。ちなみに、この作品の原題 *The Giving Tree* 自体も大変日本語に訳しにくいものですが、本田はこれを『おおきな木』と訳しました。少年に与え続ける寛大さを懐の大きい木として表現したものでしょうか。村上もこの邦題を踏襲しています。

なお、50周年記念に出版された絵本のバージョンにはCDがついていて、作者のシルヴァスタイン自身の朗読を聞くことができます。ハーモニカのBGMとともに6分ほどかけて本作を朗読していますが、本文に忠実に読んでいるのではなく、一部はしょったり、言葉を足したりしています。そしてこの朗読では上述の文、*And the tree was happy...but not really* の *but not really* の部分は割愛されています。このことも木は幸せだったのかという問いについての「謎」をさらに深める材料になりそうです。

最後に、本文はすべてモノクロで描かれていますが、表紙はカラーで緑色。少年の服とリンゴの実だけが赤いカラーで描かれています。

指導ポイント・授業活用例・学生の声など

【注意すべき英語表現ほか】

過去の習慣を示す *would* が繰り返し使われています。

例) *And every day the boy would come*

And he would gather her leaves

【授業活用例】

a) 音読

短い作品なので、音読もしくは読み聞かせがおすすめです。どのように感情を込めて読むかによって解釈も異なるので、ペアで互いに読んでみるのも面白いでしょう。まず自分で読んでみて、その後、作者がどう読んでいるかを確認すると(上述の作者の朗読についての解説参照)、違いがさらに浮き彫りになります。

b) 翻訳

まず学生に本文の短い英文(And the tree was happy...but not really の部分を含むとよいでしょう)を翻訳させてみて、その後、ペアで比較したあと、本田版と村上版と提示すると面白いでしょう。(作品の鑑賞に和訳が必ずしも必要なわけではありませんが、捉え方の違いに気づくきっかけとして利用する。)

c) ディスカッション

以下のようなテーマで話し合いをしてみましょう。(ワールドカフェの形式もあり。)なお、ディスカッションのあとに様々な解釈や守屋(1994)の調査結果を紹介すると、読みが深まります。

- この作品のメッセージは何でしょうか。
- 木と少年の関係をどう思いますか。
- この木が she ではなく he で、少年が少女だったら、イメージはどう変わりますか。
- この木の与え続ける行為をどう思いますか。
- 木は幸せだったと思いますか。
- 少年は幸せだったのでしょうか。
- この物語はハッピーエンドと言えるでしょうか。
- だれかに贈り物をするとき、あなたが気を付けていることはどんなことですか。
- この作品は白黒で描かれていますが、どんな効果があると思いますか。

関連作品・参考 URL

- 守屋慶子 (1994) 『子どもとファンタジー—絵本による子ども「自己」の発見』新曜社

なお、以下のウェブサイトには 1973 年のシルヴァスタインの朗読がアニメーションと一緒にアップロードされています (約 10 分)。他にもディスカッションのヒントになる問いが含まれています。

<https://thekidshouldseethis.com/post/the-giving-tree-animation>

(文責：小林めぐみ)